原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及特集号

第百六十六号

原告団レポート

CO患者――田中　始さん

定年後のその歩みは

子どもの担任教師の言葉に、うけた衝撃

積極的に生きる、というが

見た人柄

熊本県荒尾市原万田一五二、万田社宅山下町三棟に住むCO患者の田中始さん。取材のため住まいをおとずれたとき、彼の口をついて出た言葉には大いにとまどわざるを得なかった。

「私は、新聞に顔を出すなどということはきらいです」

とまどいながらも聞く――

「なぜですか」

「どうも、世間に対してあわれみを乞うように思われてならんとですたい。自分のCO中毒症はこれこれ、こういう状態だと……」

「……？」

「自分としては、人に負けない気持で、リハビリのつもりで、少くともギリギリ自分にやれる程度の仕事を選び、ぶつかっていく。そんな積極的な生き方がしたい。私が、だからすすんで選んだのが選炭場の仕事だったんです」

わかった。ほかのCO患者とてそんな気持でいることに変わりのあろうはずはないが、語る彼の言葉のなかに秘められた誠実な人柄をかいま見た思いがしてすがすがしかった。

もともと被災前の彼は、厳とした坑内掘進工だった。今は、坑外の選炭場で働く機械工。機械工といっても、具体的な仕事はピッキング。昔は手選といわれて、坑内から送られてくる石炭のなかに混入する雑品を、二人で選り分けては取り除く作業。本来の彼の掘進には比ずべくもない。

「それはそれとして、一人のCO患者が、人に頼るばかりでなく自分でもこのようにして中毒症を克服するため心を砕き、人間としても積極的に生きようとしている姿を、全国の働く仲間に見てもらうこともまた、忘れてはならぬことではないでしょうか。同時に、CO中毒症について語るべきことはちゃんと語ること。これも大切だと思います。何はさておき、私たちは三井の災害責任をなっとくのいくところまで追及することを覚悟していることですからね」

彼が、心よく取材に応じてくれたのはもちろんである。

運命背負い

田中さんは、大正十五年十月一日生まれだから五十四歳。自宅から、毎日三川鉱の巨大な選炭場に通勤している。

妻のハツ子さんは恋女房。昭和六年六月十日生まれで四十九歳。結婚したのは、昭和三十年十二月十八日。彼が三十歳で、彼女が二十四歳のときのこと。早くから裏い合ってきた仲だったというから、二人のうれしさは格別だったことだろう。それから八年後の昭和三十八年十一月九日、彼が働いていた三川鉱で炭じん大爆発が起き、被災してその人間を大きく傷つけられるばかりでなく、そのためまわりの家族までが、思いも寄らぬ苦しみをなめさせられることなど知るよしもなかったから。

ゆかりの誠

子どもは三人。三十一年十二月十四日生まれの、長女ひとみさんが二十三歳。三井アルミに働く配偶者を恵まれ、来年は赤ちゃん誕生の予定とか。

次女はまゆみさん。三十三年十月三十日生まれで二十一歳。両親のもとから、大牟田のデパートへ毎日通勤。

ひとり息子の誠之君は、三十七年六月二日生まれで十八歳。まだ高校生。

「誠之」という名まえにはエピソードがある。

誠之君が誕生するころ、父親の田中さんが結集する職場分会の分会長に、井手誠という仲間があった。広く尊敬を集めていた優れた活動家だったから、まことに彼らしく「よし、男の子が生まれたら……」と、前まえから同分会長にあやかって、その名まえの「誠」をもらい、わが子に「誠之」と名づけることを心にきめていたという。ところが、かんじんの井手誠職場分会長もまたあの炭じん大爆発の犠牲とされ、今はすでに世にないが……。

中毒の体で

三川鉱の坑内で、あの炭じん大爆発が起きた日、彼は二番方として働くために坑内の現場に着いた直後に被災した。昭和四十六年四月作成されたカルテに、「被災地点は岩盤二十六卸一目貫だった」と記録されているが、意識喪失で倒れているところを担架でかつがれ、宮浦鉱の坑口から脱出したのだという。

田中さんは、そのまま戦地の野戦病院と化した三井天領病院に、三日間寝かされたあと退院。一時意識を喪ったものの、それほどのこともなさそうだったばかりでなく、同地域に住む仲間の間から、次つぎに犠牲者が出ていることが伝えられると、そのまま病院などで安閑としている気がしなかったのである。というのは、当時彼は地域のれっきとした分会長という重責を背負ってもいたから。現に家に帰るやいなやそのまま飛び出していき、次つぎに葬式が営まれる家いえを手伝って回ったり、余りにも大きな悲しみにうちひしがれた家族たちをはげましたり、地域の責任者として昼夜をわかたず奔走した。「それこそ、天領病院から帰った主人は、夜さえ家にいることが少く、自分の体のことなど考えるヒマなんかございませんでした」、と妻のハツ子さんは述懐するが、不幸なことにそのときの彼の活動が、すでに彼の体をとらえてしまっていたCO中毒症を増幅することとなったのは指摘するまでもなかろう。

カラの香典

彼が、恐るべき一酸化炭素におかされていることは、幾日もしないうちにわかった。大爆発の犠牲となって死んでいった彼の仲間の家族が、とある日彼の家をたずねてきて妻のハツ子さんにささやいた。

「お宅のご主人からいただいた香典が、袋ばかりで中身がはいっていませんでした。失礼とは思ったけど、もしかして、ほかにもこんな例があるのでは……と心配だったから、奥さんにだけはうち明けときたいと思って……」

さっそく、香典を贈った家いえを調べて見ると、からっぽの袋だけを贈っている例がほかからも出てきたのにびっくり。ハツ子さんは、目の前が真っ暗になった気がした。夫がCO中毒におかされていることは、余りにも明らかだったから。日ならずして、頭痛やイライラも出てきたが、こうして田中さんのCO中毒患者としての歩みがはじまる。

同じ症状が

翌る年――昭和三十九年の正月三井病院の万田分院に入院。それから大牟田労災病院へ移るが、四十一年十月末、七百四十三人の患者仲間ともども、政府が、そのときまで続けてきた補償を有無をいわせず打ち切ってきたため、やがて同病院を放り出される。以後、坑外の軽作業に復帰したあと、四十六年の十月さらに今の選炭場へ。機械工として働くことになり今にいたっている。

彼も他の例にもれず、頭痛、つかれ易い、物忘れ、易怒、多幸など、CO患者に共通する症状に長く身をさいなまれてきたが、とりわけ、ときに、それほどハッキリした理由もなく爆発する感情にはなすすべがなかった。それは妻だろうと、幼い子どもだろうと、そのほか身内のだれであろうとかまうことなく爆発した。

つい数年前のメーデーの日のこと、外出からわが家へ帰った妻のハツ子さんは、玄関の戸を開けたとたん自分の目を疑った。足もとに、玄関から部屋に通ずるところに立つ障子が、跡形もなくこっぱみじんに打ち砕かれて、足もとに散っていた。夫が嫁入り前だという自分の妹を、何に感情を爆発させたのか、追い回したあとの仕打ちだったのだが……。

暗い子もど

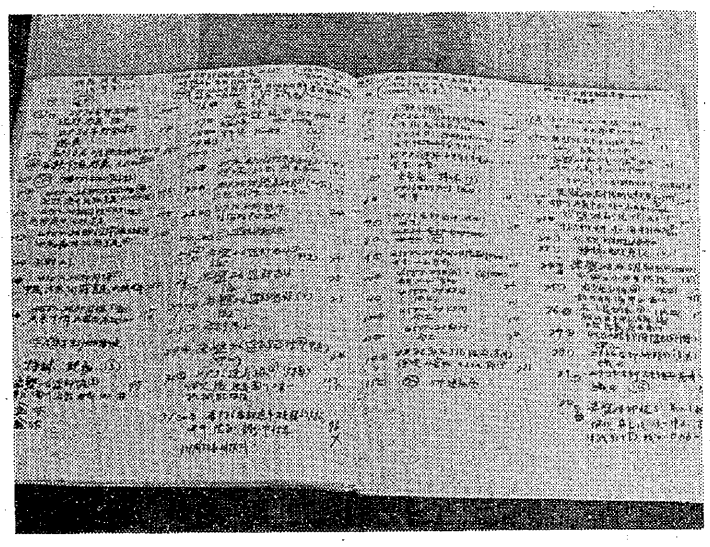
ひとり息子の誠之君が小学校の五年生のころ、担任の教師が家庭訪問のためやってきた。そしてその教師は初めから終りまで、「誠之君は暗い」「いつもおどおどして、勉強のときさっぱり落ちつきがない」など、くり返しくり返し報告したあと、「家庭で何ごとかあるのでは……」。問われたときばかりが、ハツ子さんは返す言葉がなかった。それ以上に、傷ついた心に衝撃を受けたのが田中さん自身で、それから感情の爆発もしだいに落ちつきに向ったという。

誠之君が中学に進学したときの担任教師は、一転して次のように評価した――「お宅の子どもさんには、いうところはありません」。

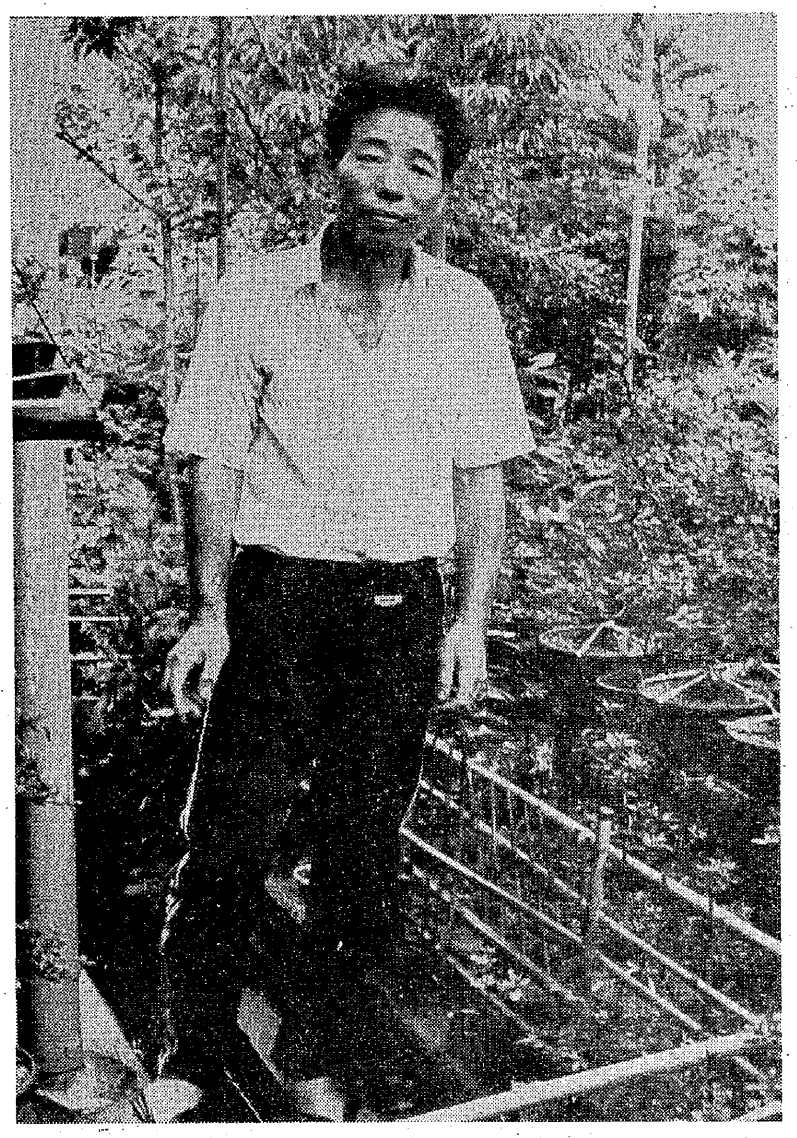
これからは

かって、あれほど真面目で厳しかった夫。炭鉱夫として、その暮らしこそ貧しかったものの、ハキモノ一つ汚れていず、いつもきちっと身ずくろっていた彼。高等科に在学中「副級長」として、荒尾尋常高等小学校長から賞をもらうほど秀いでた存在だった人間。

三池炭鉱の労働者としては、三池労組の闘いをささえる職場や地域の活動家として常に先頭に立ってきた田中さん。「としをとった今は、おかげで主人の症状もずいぶん落ちついてきましたのでほっとしています」、とハツ子さんはいうが、来年は定年。彼の人生はこれからどんな歩みを見せていくことか。



田中さんは、このようなノートに、何冊も日記を書き続けてきた。今は思いも寄らないが、写真はその一つ。



彼には、これという趣味もない。ただ一つ、リハビリのつもりで始めたのが盆栽づくりがある。「今年はずいぶん花が楽しめました」と妻のハツ子さん。